

# 聖書の植物の姿と効用 7 \*

—旧約聖書の植物 3 (レビ記, 民数記, 申命記, ヨシュア記の植物) —

廣 部 千恵子

## Abstract

Plants of the Bible in *Leviticus, Numbers, Deuteronomy, and Joshua* are described in this paper. However, plants already described in No. 1-6 are not included in this paper.

前回までに旧約聖書の植物の中から創世記, 出エジプト記の植物について検討してきたが, 今回はレビ記, 民数記, 申命記, ヨシュア記の中に登場してくる植物について考察を加える。既に前回までにかかなりの植物について述べてきているので, 各箇所について既述のものは省略している。なお引用した図面に特に引用文献の番号を附していないものは, すべて M. Zohary の *Flora Palaestina* からのものである。

レバノン杉 *Cedrus libani*

エレズ (עֲרֵז)

ヘブライ語でエレズ (עֲרֵז) とかアラジーム (עֲרֵזִים エレズの複数形) となっている植物がレバノンとの関連で書かれているときにはレバノン杉 (*Cedrus libani*) である。レバノンとの関連で書かれていない時には, アレッポ松 (*Pinus halepensis*) などのことがある。スギが清めの儀式との関連で書かれている時にはレバノン杉に似ているギョリュウ (前述), フェニキヤビャクシン (*Juniperus phoenicia*) などが考えられる。レビ記 14: 4 ~ 6 には



レバノン杉

\* Plants Described in the Bible: Their Anatomy and Everyday Use 7  
—Plants Described in the Old Testament, Part 3 Plants in *Leviticus, Numbers, Deuteronomy, and Joshua*—

祭司は清めの儀式をするため、その人に命じて、生きている清い鳥二羽と、杉の枝、緋糸、ヒソプの枝を用意させる。次に、祭司は新鮮な水を満たした土器の上で鳥の一只を殺すように命じる。それから、杉の枝、緋糸、ヒソプおよび生きているもう一只の鳥を取り、さきに新鮮な水の上で殺された鳥の血を浸してから、清めの儀式を受ける者に七度振りかけて清める。

とあり、清めに用いているのでギョリュウかフェニキヤビャクシンのようなものであろう。度々行なわれた清めの儀式の為に遠く離れた手に入れにくいレバノン杉を使用することは不可能である。民数記 19：16 も同様である。

祭司は、杉の枝、ヒソプ、緋糸を取って、雌牛を焼いている火の中に投げ込む。

レバノン杉は石の多い高さ 1400～1800 m 位の高地に生えている。この高度の気候はイスラエルの気候とは大分異なる。実際にレバノン杉の分布はイスラエルとレバノンの国境近くまで認められているが、国境を越えたことはないと言われている。イスラエルのベングリオン国際空港の側にある聖書植物園ネオットクドミムにレバノン杉を移植しようとした時、どこに植えても根づかなかったそうである。たった一カ所現在のところ以外は全て現在の技術をもって出来なかつたそうである。条件が合えば、このように移植されたものは他にもあるであろう。

レバノン杉の形は非常に美しく、樹齢の高いものになると高さ 30 m、直径 2 m 以上になることもある常緑樹である。この樹木の王のように思われているレバノン杉は樹齢 2000～3000 年に達するものもある。円錐形の樹形で、枝は水平に茂り、短い青みがかった緑色の針状葉を密に束生する。雌球花と雄球花は別々の枝につき、雌花はやがて種子を上部につけた沢山の果鱗を持った球果になり、成熟すると果鱗が一枚一枚種と共に剥がれて落ちる。ピラミッド形の堂々とした姿は、力、高さ、栄光、富のシンボルのようなものである。ことに冬にこの杉が雪を被ると見事である。ところが、ダビデ、ソロモンに始まって、アッシリアの王、バビロンのネブカドネツアル王、第二神殿の建設、さらには近隣諸国からの伐採により、今ではかつて豊であったレバノン杉の森も数少なくなつてきてしまっている。人間の手による自然破壊は、既にこの頃から始まっている。聖書の中から伐採の数例を拾ってみよう。

ティルス王ヒラムはダビデのもとに使節を派遣し、レバノン杉、木工、石工を送つて来た。彼らはダビデの王宮を建てた。ダビデは主が彼をイスラエルの王として揺るぎないものとされ、主の民イスラエルのために彼の王権を高めてくださったことを悟った。

(サムエル下 5：11～12)

レバノン杉も、シドン人とティルス人が大量にダビデのもとに運んで来たので、その数は分からなかった。(歴代誌上 22：4)

またレバノンからレバノン杉、糸杉、白檀の木材を送ってください。わたしは、あなたの家臣たちがレバノンの山林の伐採のことをよくわきまえていることを知っています。わたしの家臣をあなたの家臣と共に働かせ、大量の木材を準備させていただけないでしょうか。わたしは輝かしく偉容を誇る神殿を建てようとしているのです。……ティルスの王ヒラムは、ソロモンに次のような返書を送ってきた。「主は御自分の民を愛して、あなたをその王とされた。」彼はまたこう言った。「天と地をお造りになったイスラエルの神なる主はたたえられますように。主はダビデ王に賢明で聡明な洞察力のある子をお与えになり、その子が主のために神殿を、国のために王宮をたてようとしています。……我々はあなたの必要とする木材をレバノンで伐採し、いかだに組んで海路ヤッファまで届けます。それをエルサレムまで運ぶのは、そちらでお願いします。(歴代誌下 2：7, 8, 10, 11, 15)

王はエルサレムで銀を石のように、レバノン杉をシェフェラのいちじく桑のように大量に供給した。(列王記上 10：27)

彼らは石工と大工に銀貨を支払い、シドン人とティルス人に食べ物と飲み物と油を与え、ペルシャ王キュロスの許しを得て、レバノンから海路ヤッファに杉材を運ばせていた。(エズラ 3：7)

さて樹木について論じれば、レバノン杉から石垣に生えるヒソブにまで及ぶ程の知恵を持っていたソロモン王がなぜイスラエルにあるいちじく桑を建築に使用しないで、多くの犠牲を払ってまでして高価なレバノン杉を使用したのでしょうか。ソロモン王はエジプトのファラオの娘を妻としている。エジプトのことには詳しいはずである。エジプトではいちじく桑が棺桶に使用されるほど腐りにくい良いものであることを当然知っていたはずである。

ネオットクドミムの N. Hareuveni は次のように言っている。

「レバノン杉は力、高さ、栄光、富を象徴する。しかしいちじく桑はレバノン杉ほど大きくもならず、樹冠もレバノン杉のように立派ではない。ソロモン王が地元沢山生え

ているいちじく桑を使うかわりにレバノン杉を輸入しようと決心したのは、エルサレムの名声を他の国々に分かせたかったからである。」

ソロモン王はまた列王記上7：2～5にあるようにレバノンの森の家を建てた。

彼の建てた「レバノンの森の家」は、奥行きが百アンマ、間口が五十アンマ、高さが三十アンマで、レバノン杉の柱を四列に並べ、その柱の上にレバノン杉の角材を渡した。各列十五本、計四十五本の柱の上にある脇廊の上にもレバノン杉で天井を造った。三列の窓枠にはめられて、窓が三段に向かい合っていた。すべての扉と枠組みの柱は四角形であり、窓は三段に向かい合っていた。

これは新共同訳の聖書の文章であるが、この文章からはソロモン王が「レバノンの森の家」を建てたことは分かるが、後はさっぱり分からない。新改訳には次のようになっている。

彼はレバノンの森の宮殿を建てた。その長さは百キュビト、幅は五十キュビト、高さは三十キュビトで、それは四列の杉材の柱の上であり、その柱の上には杉材の梁があった。また四十五本の柱（一列に十五本ずつ）の上の階段式脇間の屋根は杉材でふかされていた。戸口は三列、三階になって、向かい合っていた。戸口のとびらと戸口の柱とはすべて四辺形で、三階になって向かい合っていた。

これも分かるのは前半のみで、後半は新共同訳よりもさらに分かりにくい。以前の聖書解釈者たちはこの文を見てソロモン王は実際に涼しい所に別荘を建てたと考えた。これに対してハルベニー博士は、「これは実際の森ではなく、森のように見えるトリックを使ったのだ」と述べている。そして列王記のこの箇所は「ヘブライ語に対する解釈の不足から異なる訳がなされているものがある」と言っている。ソロモン王の「レバノンの森の家」は、実際のレバノン杉の枝付きのしかも葉もついているものを縦の柱に使い、それを四列に十五本ずつ並べ、見通しのきく三列の通路の両側には鏡がはめられ、あたかも広い森にいるような錯覚に陥るように造りだしている。

ויבן את־בית־יער־הלבָּנוֹן מֵאֵה אֶרֶץ וְחֲמִשִּׁים אַמָּה רָחֵבוֹ וְשְׁלֹשִׁים אַמָּה קוֹמָתוֹ  
עַל אַרְבָּעָה טוּרֵי עַמּוּדֵי אֲרָזִים וְכִרְתוּת אֲרָזִים עַל־הָעַמּוּדִים:

וּסְפֵן בְּאֵרוֹ מִמַּעַל עַל־הַצְּלָעוֹת אֲשֶׁר עַל־הָעַמּוּדִים אַרְבַּעִים וְחֲמִשָּׁה חֲמִשָּׁה עֶשֶׂר הַטּוֹר:

וּשְׁקִיִּים שְׁלֹשָׁה טּוֹרִים וּמַחְזָה אֶל־מַחְזָה שְׁלֹשׁ פְּעָמִים:

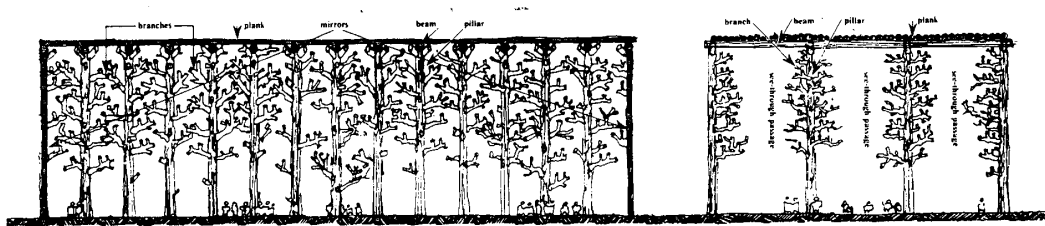
וְכָל־הַפְּתָחִים וְהַמְּזוּזוֹת רַבְעִים שְׁקָף וּמוֹל מַחְזָה־אֶל־מַחְזָה שְׁלֹשׁ פְּעָמִים:

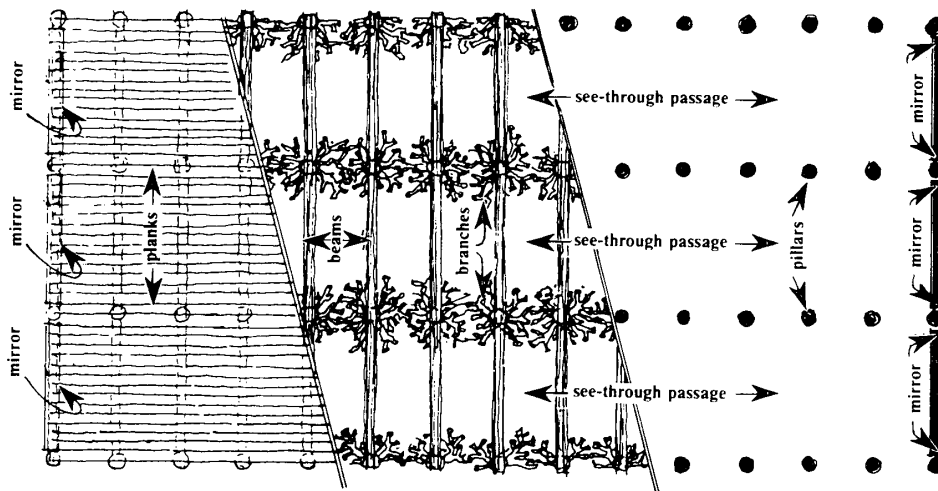
Harueveni の説を説明するためにヘブライ語の原典を引用した。ヘブライ語は三つの文字をルートとして出来上がっている。例えばクルトットゥ (כְּרַחֹת) はルート, カフ・レーシュ・タブ (כַּרַת 切る, 例えば木や枝を切るなどの意味) から誘導された言葉で, レバノン杉を切ったままの状態, つまり枝も針状葉もついた木を使用したことが考えられる。またシュクフーム (שְׁקִיִּים) は透かして見る, 透明に見えるなどの意味で, ここでは透明に見える通路を意味する。シャケフ (שְׁקָף) は透明なの意味で, それぞれルート, シン・クフ・フェー (שְׁקָף) から出来ている。同様にメヘザー (מְחִזָּה) は見る場所, 見える場所などの意味でルート, ヘット・ザイン・ヘー (חִזָּה) から出来ている。ここではつまり鏡であろうという。

以上の Harueveni の説を日本語に訳すと次のようにこの箇所はなる。

彼はレバノンの森の家を建てた。長さが百アンマ, 幅は五十アンマ, 高さは三十アンマで, 四列に枝のついているレバノン杉の柱を並べ, その柱の上の梁の上に四十五本のレバノン杉を一行十五本ずつ用いて屋根とした。そこには三列の見通せる通路があり, その(通路の)端は三つの鏡があった。すべての扉とドアの枠は透明な四角であった。反対側も同様に鏡が三つはめられていた。

現在に至るまでレバノン杉の生育地がレバノンとイスラエルの国境を自然には越えないことを考えると, ソロモン王はエルサレムにいながらにしてレバノンの森の雰囲気, そしてレバノン杉に象徴される権力と栄光を皆に示したかったのであろう。Harueveni の考え方は大変面白いのでここに彼の描いた図を紹介しよう。





### アレppo松 Pinus halepensis

オーレン (אורן) ただし現在ヘブライ語に於いてである。聖書ヘブライ語ではオーレンは月桂樹に当てている)

杉と訳されているところで前述のようにレバノン杉でないところもある。

ソロモンはオリーブ材で二体のケルビムを作り、内陣に据えた。その高さは十アンマであった。(列王記上 6:23)

ソロモンは内陣の入り口にオリーブ材の扉を付けた。これは四角形であった。(列王記上 6:31)

「山に行き、オリーブの枝、野生のオリーブの枝、ミルトスの枝、なつめやしの枝、その他の葉の多い木の枝を取って来て、書き記されているとおりに仮庵を作りなさい。」(ネヘミヤ 8:15)



雪で倒れたアレppoマツ Pinus halepensis

ネヘミヤのエツ シェメン (אֶשׁ שֵׁמֶן) を除いてこの他列王記上 6:31, 32, 33 の4箇所はアツエイ・シャメン (אֶשׁ יַעֲשֵׂן) となっている。共に油の木の意味である。

現在クルドにあるユダヤ人の村にアレppo松と同

じ仲間の松 *Pinus brutia* がある。この松に対して人々はエツ シェメンという名を使っている。ゾハリーはこの事実からここはオリーブではなくアレppo松と訳すべきだといっている。

アレppo松は聖地にかつてかなり沢山自生していた。今でも石灰岩やレジナ土のところに自生している。大きくなると 20 m にもなり、樹齢も 100~150 年になる。カルメル山にも今よりも多く自生していたようである。光を好み、枝を水平に伸ばすが、上に枝が覆い被さると下枝は枯れてしまう。2 対の針状葉が集まった常緑樹で、花は松かさの中にあり、雄花は低い枝に、雌花は高い枝に生える。黄色いほこりのような花粉が風で飛び散り、受粉する。受粉後種が実るまでに 15 月かかる。長い翼のついた種は熟すと松かさが開いて種が出る。地中海性の松でアフリカ北部にも自生する。エジプトでも栽培されている。木の皮は収斂性があるので粉にして傷に外用する。木を乾留して得たタールを傷、皮膚の消毒や殺菌に使用する。種を蜂蜜と混ぜて朝真っ先に服用すると精子形成作用があると言われている。

## フェニキヤ ジャクシン *Juniperus phoenicia*

アルアル (עֲרֵב)

主はこう言われる。呪われよ、人間に信頼し、肉なる者を頼みとしその心が主を離れ去っている人は。彼は荒れ地の裸の木。恵の雨を見ることなく 人の住めない不毛の地 炎暑の荒れ野を住まいとする。(エレミヤ 17: 5~6)

川沿いの町、すなわちアルノン河畔のアロエルからギレアドに至るまで、我々の手に陥らなかった町は一つもなかった。そのすべてを我々の神、主は我々に与えられた。(申命記 2: 36)

杉と書かれている所に加え、エレミヤの裸の木と申命記のアロエルは共に *Juniperus* (ネズミサシ属) と考えられている。これはネズミサシに対してアラブの幾つかの国でアルアルと呼んでいることに基づいている。

*Juniperus phoenicia* は 5 m 以下の低木で上の方で枝分かれています。葉は小さな鱗片状の小葉である。単性花で雄花が尾状花で、雌花が少しの鱗片からなっている。

エジプト、モロッコにも自生している。葉の熱煎液は子供の下痢や、腹痛の鎮静に用いる。また葉を乾燥して粉にしたものは皮膚の炎症、特に赤ちゃんに使用する。また、下痢、腸内消毒にも使用する。葉は通経剤として用い、赤ちゃんが生まれる時の子宮収縮にも使用する。下痢止めとしても使用する。

## 仮庵の祭り

レビ記 23：39～40 の

なお第七の月の十五日、あなたたちが農作物を収穫するときは、七日の間主の祭りを祝いなさい。初日にも八日目にも安息の日を守りなさい。初日には立派な木の実、なつめやしの葉、茂った木の枝、川柳の枝を取って来て、あなたたちの神、主の御前に七日の間、喜び祝う。

に書かれている4つの植物について言及する前に、この植物を使用する仮庵の祭りについて少しだけ触れておく。イスラエルには大きな3つの大切な祭りがある。第一が過越しの祭りで、第二が初物を刈り入れる時、第三が年の終わりに産物を収穫するときである(出エジプト記 14～17)。この第三の祭りの年の終わりとは農業の終わりを意味している。イスラエルでは10月初旬から中旬にかけての頃である。イスラエルでは雨季と乾季がはっきりと分かれている。夏場は全く雨が降らないが、十月になると最初の雨に会うことがある。その前にもし畑に収穫物が残っていれば急いで取り入れる。いちじくやぶどうは収穫し、余分なものは保存食として広げて乾かし、干しいちじく、レーズンとして蓄える。オリーブは木から叩いて落とし、油を絞ったり、漬けものにする。なつめやしも収穫し、シロップ漬けやドライフルーツにする。幾らかは蜜をつくる。

麦打ち場と酒ぶねからの収穫が済んだとき、あなたは七日間、仮庵の祭りを行ないなさい。(申命記 16：13)

主はモーセに仰せになった。イスラエルの人々に告げなさい。第七の月の十五日から主のために七日間の仮庵祭が始まる。初日に聖なる集会を開きなさい。いかなる仕事もしてはならない。七日の間、燃やして主にささげる物をささげ続ける。八日目には聖なる集会を開き、燃やして主にささげる物をささげる。これは聖なる集まりである。あなたたちはいかなる仕事もしてはならない。(レビ記 23：34～36)



あなたたちは七日間、仮庵に住まねばならない。これは、わたしがイスラエルの人々をエジプトの国から導き出したとき、彼らを仮庵に住ませたことを、あなたたちの代々の人々が知るためである。わたしはあなたたちの神、主である。(レビ 34:42~43)

シナイは秋になるとほとんどの生き物が姿を消す。井戸や水たまりは干上がる。羊やらくだの群れを集め、なつめやしの実を干し、蜜をつくる。なつめやしの種も動物の餌にする。葉は小屋を作ったり、バスケットを作る。繊維は縄などを作る。このような時期には移動の時に使用したテントよりも仮庵の方がよい。人々はなつめやしで仮庵を造って緑が芽生えるまでそこに住み着く。

さて初めに引用したレビ記 23:39~40 に話を戻す。Harueveni の説から抜粋してみよう。ここに書かれている立派な木の実とは何であろうか。木もそして果実も立派なのは何であろうか。ザクロ、イナゴマメなどが考えられるが、木か果実か何れかが立派でない。イスラエルではこの両方の条件を満たすのがクエン(エトログ)であると言っている。なつめやしは既に解説した。しかし現在イスラエルではなつめやしの葉ではなく、ルーラブと呼ばれる中心の芽のところを使用している。茂った木の枝は何であろうか。これに対してもいろいろな木が考え得る。茂った木の枝、葉が茂って木が見えないような木は何か。オリーブは幹が見えている。プラタナスは落葉する。聖地ではセイヨウハナズオウがこんもりとしているが、これは有毒植物である。そこでミルトスが候補に残るわけである。川柳の枝とはヤナギやポプラのような水辺の植物である。Maimonides はスコットに用いる四つの植物は出エジプトのシンボルであると言っている。砂漠にいた時、民はナツメヤシの木陰で涼み、ナツメヤシで仮庵を造った。ナツメヤシは砂漠のシンボルである。柳はヨルダン川のほとりに生えている。イスラエルの民が長い放浪の生活を終えようとした時、渡ったヨルダン川の記念が柳である。十二部族はヨルダン川から石を拾って記念とした。この石はまだ見つかっていないが、その記念の柳は今もヨルダン川の辺に茂っている。茂った木の枝は密に茂った森を表わす。ヨシュアが民を引き連れて入った約束の地には先住民がいて茂った森しか住むところが残されていなかった。そして民はついにその茂った森を切り開いて立派な木の実のなる土地にしたのである。タルムードで聖者たちはこの四つの植物に対していろいろの説をとっている。ある者はこれを人間の体にたとえている。ルーラブは人の背骨、ミルトスは目、柳は口、エトログは人の心臓である。この四つが結ばれて一つになった時に人は神をほめ称える。ある者はこれをイスラエル人にたとえている。エトログは香りがあり、味わいもある。トラーをよく学び、よい行ないをする人を表わす。ルーラブは味わいがあるが匂いがない。トラーを学ぶが、行ないの伴わない人を表わす。ミルトスは香りがあるが味

わいがない。良い行ないをするが、学問がない人を表わす。柳は味わいも香りもない。トラーも学ばないし、行ないも伴なわない。しかしこの四つを結ぶとすべてが学問もあり、良い行ないも伴なうものとなる。

この仮庵の祭り（イスラエルではスコットと言っている）について、さらに四つの植物についての様々な説を紹介すればきりが無い。そこで各論に移る。

シトロン、クエン Citrus medica

エトログ ( אֶתְרוֹג )

この植物はイスラエル固有種ではない。大昔にインドから導入されたものである。立派な木の実（エツ ハダル）という言葉は聖書ではここにもみ出してくる。類似箇所のネヘミヤ8：15には書かれていない。もっともネヘミヤ書では仮庵の建て方について述べている。

エトログは小さな刺のある常緑樹で、花は内側が白で、外側は紫がかっている。果実は卵形から長円形できれいな黄色をしている。芳香がよいが、実は酸っぱい。

エトログは繁栄のシンボルである。そこで皮に傷があったり、乳頭突起が落ちていたり、皮が一部でも剥けていたり裂けているもの、また穴が開いているなど不完全なものはスコットの祭りに使用できない。ただし少々の欠陥はよい。乳頭突起の反対の茎の部分が取れていても差しつかえない。

エトログについている乳首柱頭がなぜ大切かというと、乳首をとおして子房は花粉によって養われる。他の果実と違って、エトログの乳首は果実が熟してから果実についている。またエトログは一年中果実をつけ続ける、繁栄のシンボルになる。乳首はこの繁栄のシンボルであるから、エトログには必要な部分なのである。しかし、反対側についている茎はなくてもよい。エトログのユダヤ教の考え方については文献(63)に詳細に述べられているので参考にされたい。

本植物は原産はインドであるが、中東を経て既にローマに紀元前300年には渡っている。ローマでは部屋や衣料用の香料や虫除けに利用されたようである。現在はザボンのように皮を糖果にしている。日本にも江戸時代に伝来したようであるが、広まらなかった。ただしシトロン



スコットの前に町で売っているエトログ

の一変種のブシュカン *Citrus media* var. *sarcodactylis* は日本でも僅かに和歌山県などで栽培されている。

薬用としては干した葉 10つまみを 1 リットルの油に入れてその 2～3 カップを飲むと鎮静，強壯，駆虫，鎮痙，発汗などに使用できる。また果実をレモネードにして利尿，便通，駆虫，強壯，疲労回復，喉の痛みのうがいに使用する。果皮は強壯に，干した果皮を粉末にして強壯，健胃，利尿，発汗促進に使用する。

ミルトス（ギンバイカ），*Myrtus communis*

ハダス（𐤇𐤍𐤃）

最初に引用したレビ記の他の箇所を引用する。

荒れ野に杉やアカシヤを ミルトスやオリーブの木を植え 荒れ地に糸杉，縦，つげの木を共に茂らせる。（イザヤ 41：19）

茨に代わって糸杉が，おどろに代わってミルトスがはえる。これは，主に対する記念となり，しるしとなる。それはとこしえに消し去られることがない。（イザヤ 55：13）

「山に行き，オリーブの枝，野生のオリーブの枝，ミルトスの枝，なつめやしの枝，その他の葉の多い木の枝を取って来て，書き記るされているとおりの仮庵を作りなさい。」（ネヘミヤ 8：15）

ミルトスは香りがあり，常緑の植物であるので聖書時代にもその後の文献にも数多く登場して来る。その名は男性の名にも女性の名にもつけられている。

モルデカイは，ハダサに両親がないので，その後見人となっていた。彼女がエステルで，モルデカイにはいここに当たる。娘は姿も顔立ちも美しかった。両親を亡くしたのでモルデカイは彼女を自分の娘として引き取っていた。（エステル 2：7）

ミルトスは低木で成長しても 2 m 位にしかならない



ギンバイカ *Myrtus communis*

が、葉が密に茂っているので垣根などに使用できる。葉は3~5 cm位の長卵形であるが、1~2 cm位の小さな種類もある。夏に5裂花冠の白い花が咲き、そこから沢山の雄しべが突き出している。花の後に黒みがかかった青色の実がなる。

ミルトスは現在ガリレヤとゴラン高原のスロープに自生しているが、カルメル山などにも多少自生する。柳と異なり、ミルトスは枝を切ってから水がなくてもかなり長持ちする。そこでミルトスは不死と成功のシンボルのようによく使用される。ミルトスの枝を燃やすとそこから新しい芽が出て来る。この時3枚葉のミルトスが出てくるそうである。ミルトスは火のダメージにさえ絶えるわけである。3枚葉のミルトスはスコットの祭りに使用する。

ミルトスの枝は死のベッドに、また反対に花嫁のウエディングリースに編み込まれる。また店をミルトスで飾るのは成功と幸運を願って、我々の仕事がミルトスのように強く、いつまでもしおれないようにとの思いからであろうか。

薬用としてもいろいろ使用されている。ミルトスの浸剤は刺激、興奮剤や抗下痢薬となり、根は収斂剤になる。葉と若い枝の煎じたものは喘息の薬になる。葉はまた健胃剤、収斂剤、呼吸器の殺菌剤となる。またハップ剤としても痛みのあるところに使用する。葉を煎じたものは髪の毛を黒くするために使用する。ミルトスの葉を他のハーブと混ぜたものは香料の殺菌剤としても用途がある。葉はまたおできや潰瘍の薫剤やハップ剤に利用できる。その他精油を殺菌剤としたり、乾燥したつぼみを天然痘に使用したり、花を煎じたものは血液の循環調整に使用したりしている。コプト人の医療ではミルトスとヘンルーダとある種の鉱物を処方して皮膚病を治していた。

## ヤナギ *Salix alba*, *S. acmophylla*

アラバー (אֲרָבָה) アラビーム (複数形 אֲרָבִים)

わたしは乾いている地に水を注ぎ、乾いた土地に流れを与える。あなたの子孫にわたしの霊を注ぎ、あなたの末にわたしの祝福を与える。彼らは草の生い茂る中に芽生え、水のほとりの柳のようにそだつ。(イザヤ 44:3~4)

バビロンの流れのほとりに座り、シオンを思って、わたしたちは泣いた。豎琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。(詩編 137:1~2)

彼がそてつ木の下や、浅瀬の葦の茂みに伏せるとそてつ木影は彼を多い、川辺の柳は彼を包む。(ヨブ記 40:21~22)



ヤナギ *Salix*. sp.

また、その他の種を取って苗床に蒔き 苗を豊かな水のほとりに柳のように植えた。  
(エゼキエル 17：5)

イスラエルでは川辺の柳として上記のシロヤナギ *Salix alba* とトガリバヤナギ *Salix acmophylla* がある。シロヤナギはトガリバヤナギよりも寒冷地、つまり北部に多く、トガリバヤナギは熱に強いのでより南部に多い。しかしヨルダン川がさらに南部に行くと、塩に耐えるユーフラテスポプラが多くなって来る。ヤナギの葉は夏の終わり頃になると落葉する。花は尾状花序で雌花と雄花は異なる木につく。花期は初冬で果実は初夏に熟す。日本語で柳と翻訳されているところで、詩編 137：1～2 はユーフラテスポプラであろうとされている。ユーフラテスポプラ *Populus euphratica* は塩耐性があり、ナツメヤシと共に砂漠の泉やオアシスの側に育っている。しかしエゼキエルのツァフツァファー (  $\text{תְּצַפְצָפָה}$  ) は言語的にみて柳の可能性も、ユーフラテスポプラの可能性もあると Zohary は言っている。アラブの国では柳はサフサフと呼んでいるが、北アフリカのアラブ人はユーフラテスポプラをサフサフェルまたはサフサフと呼んでいるからである。ユーフラテスポプラの若い葉は柳に似ているが、成長して来るとポプラのような葉になるので柳と名前も混同しているのであろう。

柳の樹皮は解熱剤、リウマチ、強壯剤、収斂剤、殺菌剤、傷の治療に使用し、葉は鎮静剤、



ユーフラテスポプラ

抗癌薬などに使用する。

畑の野菜：リーキ，玉葱，にんにく，きゅうり，メロン

イスラエルの民は，シナイの荒れ野で，エジプトでの生活を思って不満をつぶやいた。

「誰か肉を食べさせてくれないものか。エジプトでは魚を食べていたし，きゅうりやメロン，葱や玉葱やにんにくが忘れられない。今では，わたしたちの唾は干上がり，どこを見回してもマナばかりで，何もない。」（民数記 11：4～6）

リーキ，玉葱，にんにくはイスラエルではごく普通の食物であるが，聖書には民数記のこの箇所，つまりイスラエルの民がシナイの荒れ野で，天から授かったマナに不満を抱き，エジプトでの奴隷生活を懐かしんで叫びをあげたところだけに登場してくる。

リーキ *Allium porrum*

ハツィール (קצויר)

近東の野菜で，いろいろな発掘から BC 2000 年以上前からエジプトの食料であったことが証明されている。青銅期中期のものがエリコからも見つかっている。メソポタミヤなどからも BC 2000 年のときに既に育っていたことが証明されている。現在イスラエルのリーキはサラダリーキ *A. Kurrat* が *A. porrum* よりもなじみが深い。両方とも野生の先祖は地中海沿いに自生する *A. ampeloprasum* でこのネギはイスラエルにも自生している。サラダリーキの方が葉が細い。

本種は日本ではニラネギ，セイヨウネギ，ポロネギ，リーキなどと呼ばれ，2 年草である。日本のネギに似ているが，葉は扁平で円筒状ではない。白根の部分は日本のネギよりも短い，質が柔らかく，においが強い。古代エジプト，ギリシャなどで既に栽培され，日本にも明治初期に導入されたが，あまり定着していない。サラダ，スープ，グラタンなどに用いる。コプト人はこのリーキと出たての尿で眼を洗い夜盲症の治療にしていた。



村の八百屋のリーキと玉葱

## 玉葱 *Allium cepa*

バツァル (בצ'ל), バツァリム (בצ'לים 複数形)

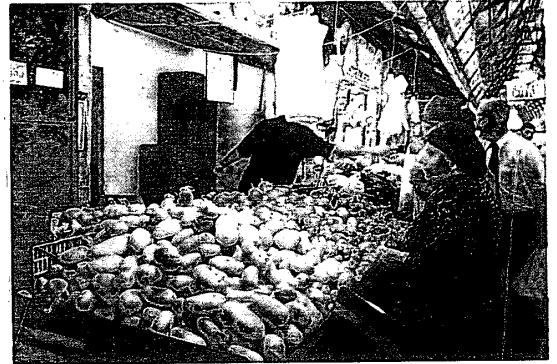
ヘブライ語でバツァル (複数形がバツァリム) といい、かなり古代から栽培されていた食物である。Unas (2420 BC) や Pepi 二世 (c. 2200 BC) のピラミッドなどからこの事実は明らかになっている。文献的にはメソポタミヤ 2000 年 BC 頃にすでに育っていたことを示している。にんにくと同様、もとは地中海性のものではない。野生の先祖はまだ良く分かっていないが、形態学的には、北イラン、アフガニスタン、中央アジアの隣接国に自生している *A. oschaninii* に非常によく似ている。しかし *A. oschaninii* を *A. cepa* と掛け合わせると種を作らない種が出来る。そこで *A. oschaninii* は玉葱の直接の先祖ではないようである。

この玉葱がにんにくと共にエジプトのピラミッド造りの労働者たちの食料とされたことが記録されている。地中海地方に広まり、そこからヨーロッパに伝わり、ヨーロッパで広まった。1347 年にヨーロッパでの疫病流行時ににんにくと玉葱を売っている店では伝染を免れたと伝えられている。その後各国で品種改良が行なわれ現在に至っている。東ヨーロッパ系は辛玉葱で、南ヨーロッパ系は甘玉葱が主流である。玉葱の外皮にはクエルセチンなどが含まれ、天然の染料として各種の媒染剤と組み合わせて黄、茶、黒系統の色を出すことに使用できる。

玉葱は食用であるが、薬用としても使用できる。鱗茎を利尿剤、抗壊血病、抗糖尿病、静菌剤、抗生物質様作用、腸の消毒、などに使用する。玉葱の粉を蜂蜜と混ぜて目の白内障予防に、さらに塩とワインを混ぜると犬に噛まれた時に使用する。また玉葱は緩和な脂肪低下剤としても、血糖低下剤としても使用出来る。ヨーロッパでも玉葱は食用であると同時に民間薬として広く愛用されてきた。玉葱には催淫作用があるとされている。また女性の顔色が美しくなるともいう。ノイローゼ、不眠症、心悸亢進、鎮痛、鎮経、浮腫、尿閉、通風、リウマチ、糖尿、駆虫、切り傷、火傷などに使用例がある。玉葱を半分に切ったもので腰や下腹部をこすると利尿作用があるなどの言い伝えもある。

## にんにく *Allium sativum*

シュム (שום), シュミム (שומים 複数形)



ユダヤ人マーケットのジャガイモ, 玉葱, キュウリ

日本ではオオニンク、オオビルなどと呼ばれている。多年生植物で地下に数個ないし十数個の鱗片を放射状に着生している。花茎は 30~60 cm でその先端に散形花序をつける。時には花をつけず、珠芽を生ずることもある。BC 2000 年以上前から栽培されていることがいろいろの発掘により明らかになっているし、BC 3000 年の楔形文字の処方がある。エジプトの他メソポタミヤ、イラクなどでも見つかっている。玉葱とともに BC 1600 年エジプトでピラミッド建設労働者がにんにくが少ないことで暴動を起こしている。当時はアメーバ赤痢の予防にもなっていた。精油 0.1~0.3% を含み、その主成分は Allicin でにんにくのおいのもとになっている。その他ビタミン A, B, C, ニコチン酸アミド、女性ホルモン様物質、サポニンなどを含んでいる。にんにくの臭気のもとの Allicin は皮膚と肺から排泄される。そこでにんにくを食べると臭くなるのである。にんにくには強い抗バクテリア作用があるが、これは長期保存で著しく減少する。野生の先祖はまだはっきりと同定されていないが、先祖と思われるものは *Allium longicuspis* である。これは中央アジア、北イラン、トルコの南東の境に分布している。近東の北東部のどこかで栽培が始まったのではないかと Daniel Zohary は述べている。

玉葱と違ってにんにくはさらに小さな 4~10 個の鱗片から出来ていて、一つ一つをまた増やすことが出来る。

にんにく、玉葱、ラディッシュはギザのピラミッド造りの労働者に与えられたという記録がある。にんにくは食用のみならず薬用にも使用された。

鱗茎は強い解毒剤、駆虫剤、低血圧に、去痰、消化剤、殺虫剤、浄化剤、強壯剤、防腐剤として赤痢などの疫病に、痔の座薬、結核、咳、風邪など幅広く使用する。また家畜の病気にも使用できる(以上 43)。長く食べると心臓や動脈硬化によい。コレステリンの濃度を下げる作用もある。慢性の鉛中毒の解毒、抗微生物効果、抗かび効果、フィブリノーゲン分解増大し、血小板凝集阻止の作用等がある(以上 43)。エジプトではにんにくは風邪、カタル、抗バクテリア剤として使用されていた。生にんにくを喘息に、にんにくとコリアンダーをブドウ酒に混ぜたものは峻下剤、催淫剤となり、酢と水とにんにくを混ぜたものはうがい薬として扁桃腺炎、歯痛に、塩と酢とにんにくを混ぜたものは打ち身に、にんにくと油を混ぜたものは皮膚病に用いられた。

にんにくはヨーロッパでも昔から使用され、強壯、利尿、駆虫、解毒、などの作用が認められ、さらに糖尿病に、血圧を下げる目的で、整腸作用のため、消毒剤として、便秘を防ぎ癌を予防する目的などで使用されている。

メロン (スイカと考えられる) *Citrullus lantanus*

アバティアハ ( אבטיח ), アバティヒム ( אבטיח 複数形)



ナイルの谷で BC 2000 年に栽培されていたことが証明されている。その他のところでもかなり以前から栽培されていたようである。果肉は白から赤で、深く切れ込んだ葉である。野生の先祖は恐らくコロシントウリ *Citrullus colocynthis* であろう。コロシントウリは多年草で 5~8 cm の直径の比較的小さな実がなり、中はスポンジ様でとても苦い。北アフリカ、西アジア、中東の砂漠や半砂漠の砂地に自生し、下剤としての作用があり (citrullin) 乾果を用いる。遊牧民たちに集められている。種子は加工によって食用になりうる。

スイカの黒い種は果実全体に広がり、この種も食用にしていた。エジプトの墓から見つかった。その後地中海沿岸、中東、中央アジア、ヨーロッパ、アメリカ、中国と伝えられ、現在は熱帯から温帯で広く栽培されている。高湿多照を好み、あまり肥料が多すぎると果実が不良になることがある。

果肉の 90% 以上は水分で、糖質 7.9%、リンゴ酸、アルギニンなどを含む。スイカの色はリコピンやカロチノイドである。スイカの種子には 20% 以上の脂質と 50% 以上の蛋白質、フィトステロール、ウレアーゼなどが含まれている。果肉は利尿作用があり、果汁を濃縮したものは腎臓障害の時に利用できる。

きゅうり (メロン *Cucumis melo* と考えられている)

キシユア (כישוא), キシユイーム (כישוים)  
複数形)

そして娘シオンが残った。包囲された町として。ぶどう畑の仮小屋のようにきゅうり畑の見張り小屋のように。(イザヤ 1 : 8)

民数記もイザヤの記載もきゅうりと翻訳されているが、メロンである。

南西アジア、エジプト辺りでかなり早い時期から栽培され始めたものであろう。甘い種類が melon, muskmelon で甘くない種類が chate melon (*C. chate*, *C. melo* var.



スイカ



マーケットのスイカ

chate)である。後者は今日では珍しいものになっているが、しばしば曲がった細長い形をしていて、きゅうりのように使用された。

栽培種の先祖は熱帯および亜熱帯アジアおよびアフリカに自生している。さらに乾燥に適した品種 *Cucumis callosus* は中央アジアおよび近東に自生し、西アジアや地中海沿いのメロンに近い性質を持っている。

*Cucumis chate* はエジプトの幾つかの墓の装飾になっている。

現在のきゅうり *Cucumis sativus* は上記のメロンと起源が異なる。現在のきゅうりは中東や地中海性のものではなく、原産地はヒマラヤとその東の近接地で、多分インド北部で栽培され、それからかなり後に地中海沿いでも栽培されるようになったと考えられる。ギリシャ、ローマ時代には既に栽培されていたようである。しかし聖書時代にはエジプトに存在していなかったとされている。

茎や花茎を去痰、催吐剤、解熱剤として使用し、種を駆虫剤、消化剤、鎮咳剤に使用する。

## その他の植物

以上述べた他にも地名などで植物の名前が残っているものがある。その一つにヒョウタン *Lagenaria siceraria* がある。

ツェナン、ハダシャ、ミグダル、ディルアン、ミツパ、ヨクテエル……

(ヨシュア記 15:37~38)

ここに出てくるディルアン (דילון) はいろいろの文献からひょうたんであろうとされている。このものはアフリカやその近隣諸国で栽培され、食品としてではなく容器として使用された。

他のものは民数記の記載にある。

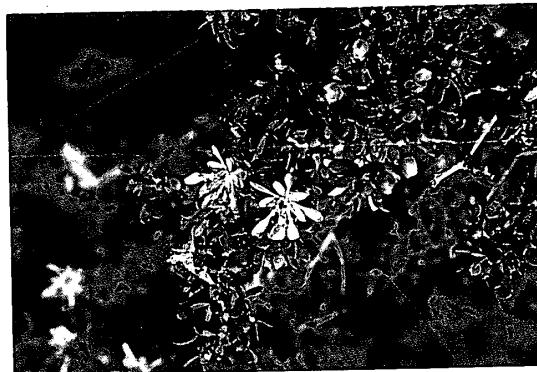
彼らは荒れ野からマタナ、マタナからナハエル、ナハエルからバモト

(民数記 21：18～19)

このマタナ (מַתָּנָה) という地名はアラブの名ミトゥナン (Passerina hirsuta) と同じかもしれないと Zohary は述べている。この植物はワジや砂漠に自生する植物で、高さ1m位の雌雄異種の常緑樹で、小さな鱗のような葉がついている。基の方は緑色であるが先の方は白く毛のようになっているので、ベドインはそれで竿をつくる。

花は小さな黄色である。

その他民数記 33：9～10 の記載にある



Zygophyllum dumosum

マラを出発してエリムに行った。エリムには十二の泉と七十本のなつめやしがあり、そこに宿営した。彼らはエリムを出発し、葦の海のほとりに宿営した。

このエリム (אֵילִם) はアラビヤ語のイラムと言語的に似ている。このイラムはヘブライ語でズガンと呼ばれている Zygophyllum dumosum のことである。この植物は現在のイスラエル南部の砂漠に自生し、シナイのある部分にも自生しているという。ズガンが何年も雨が降らなくても植物のある部分を枯らしながらも、幾らかの部分は生き延び、雨と共にまた成長を始める。高さは1m位の低木である。多肉質の葉柄に多肉な一對の葉があり、乾季の始めに落葉する。花は白で、春に咲き、果実は翼のようで、グリーンであるが、次第に黄色になる。

ヨシュア記 15—11 に

エクロンの北斜面を進み、シクロンを折れ、バアラ山を過ぎ、ヤブネルを経て、海に達する。

とある。シクロン (שִׁכְרוֹן) はヘブライ語のシクロナつまり Hyoscyamus と同定されている。Hyoscyamus 属の植物はイスラエルに5種類自生するが、この中では Hyos-

cyamus aureus が一番ポピュラーなもので、エルサレムの城壁や西の壁にも石の間から生えだしている。聖書に石垣に生えるヒソプという所があるので、数人の人はその書物に西の壁にヒソプが生えているとコメントしているが、私はまだそれを見たことはない。西の壁の植物の一つに春はこのヒヨスの仲間が生え、夏近くなるとケッパーになる。ヒヨスの高さは30~50 cm位であるが、多年草でやや粘りのある植物である。花は黄色で、雄しべと上唇の中央に紫になっている。ヒヨスの仲間にはアルカロイドのヒヨスチアミンなどが含まれ、有毒であるが、薬用として使用できる。さて、ヒヨスの仲間はイスラエルで5種類ほど自生すると述べたが、このシクロンで自生していたのはこのうちどれであろうか。Hyoscyamus aureus が一番多く自生しているヒヨスであるが、南部の方では、H. desertorum も花の紫がかった H. reticulatus も自生している。しかし H. aureus の同定がもっとも無難であろう。もっともこの地名がついた時にはそれぞれの種の分類がはっきりしていたわけではないので、ヒヨスの仲間と考えてもよいであろう。また申命記に次のような記載がある。



Hyoscyamus aureus

彼らのぶどうの木は、ソドムのぶどうの木で、ゴモラの畑で育ったもの。そのぶどうは毒ぶどう その房は苦い。そのぶどう酒は、蛇の毒 コブラの猛毒。  
(申命記 32:32~33)

という記載がある。この毒と翻訳されている所のヘブライ語がローシュ (רשע) となっている。この言葉はいろいろ意見が分かれているが、セリ科のドクニンジン Conium maculatum であるという説と前述のヒヨスであるとの説がある。アラビア語ではサカランという言葉がこの両者に当てている。ある学者はニガヨモギを当てている。ドクニンジン是有毒な1~2年草で、春に複散形花序に白い花をつける。一つ一つの花の直径は約3 mm, 果実は直径約3.5 mmの球形で、熟すと2分果に分かれる。コニインなどの有毒成分が知られている。ソクラテスはこの未熟果実の浸出液を飲んで死んだと

伝えられている。

### 参考文献

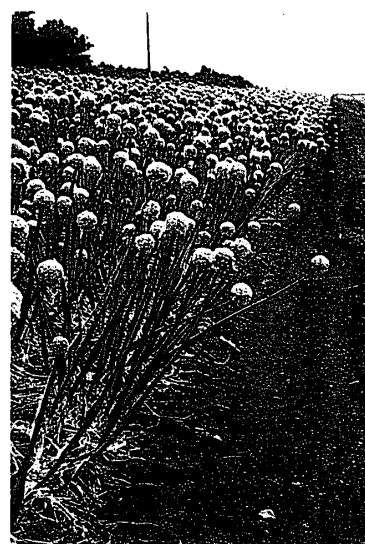
- (2) ヘブライ語聖書 Koren Publishers Jerusalem Ltd.他2種
- (5) 聖書新共同訳 日本聖書協会
- (6) 旧約新約聖書 ドン・ボスコ社
- (8) Plants of the Bible (Michael Zohary) Cambridge University Press
- (9) Plants of the Bible (Harold N. Moldenke)  
聖書の植物(9)の奥本裕昭による一部訳
- (16) Medicinal Plants of the Bible (James A. Duke) Trado Medic Books 1983
- (23) 聖書の植物 (別所梅之助) 1921
- (28) メッセゲ氏の薬草療法 (モーリス・メッセゲ) 田中幸治・高山林太郎訳 自然の友 1980
- (30) Herbs, Spice and Medicinal Plants: Recent Advances in Botany, Horticulture, and Pharmacology Volume 1 (Lylee, Craker, James E. Shimon 編) Medicinal Plants of Israel: An Ethnobotanical Survey (D. Palevitch, Z. Yaniv, A. Dafni, J. Friedman)
- (37) 世界有用植物事典, 平凡社 1989
- (40) Nature in Our Biblical Heritage (Nogah Hareuveni) Neot Kedumim, 1980
- (41) Tree and Shrub in Our Biblical Heritage (Nogah Hareuveni) Neot Kedumim Ltd.
- (42) Flora Palaestina 1-4 (Michael Zohary) The Israel Academy of Sciences and Humanities
- (43) Medicinal Plants of North Africa (Loutey Boulos) Reference Publications Inc. 1983
- (53) A New Concordance of the Bible (edited by Abraham Even-Shoshan) "Kiryat Sefer" Publishing House Ltd., Jerusalem (ヘブライ語)
- (56) Bible Works for Windows, Research Bubbler, Hermeneutika
- (59) Illustrated encyclopedia of Bible plants (F. Nigel Hepper) Angus Hudson Ltd.
- (60) 植物療法 R. F. ヴァイス著 山岸訳 八坂書房 1994
- (61) ファラオの秘薬 大槻真一郎編集 八坂書房
- (63) Halachos of the Four Species by Rabbi Yechiel Michel Stern, Feldheim publishers, Jerusalem
- (64) Domestication of Plants in the Old World by Daniel Zohary and Maria Hoph, Oxford Science Publications, 1993
- (65) Desert Vegetation Of Israel & Sinai, by Avinoam Danin, Cana Publishing House



スコットの祭りに使う4つの植物



仮庵



ニンニクの花  
(写真: オーリー・フラグマン氏)